九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ランブイエ侯夫人のサロン

進藤，誠一

https://doi.org/10.15017/2332914

出版情報：文學研究. 47, pp.43-56, 1953-12-25. 九州文学会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

ランブイエ侯夫人のサロン

進藤誠一

一六〇〇年から一六三〇年に至る時代に於けるフランス宮廷の風儀

ランブイエ侯夫人が自宅にサロンを開いて、選ばれた客人たちと高雅な、清純な社交界をつくるに至つたのは、当時のフランス宮廷の乱倫と粗暴とに嫌悪を感じたのが、もつとも大きな原因であつた。私はまずレデレールの『フランスに於ける社交界』(Pierre-Louis, comte de Rœderer: *Mémoire pour servir à l'Histoire de la Société polie en France*) によつて、ランブイエ侯夫人が結婚した一六〇〇年から二・三十年間のフランス宮廷の風儀を一瞥しておこうと思う。

一五九四年、パリとルアンの両都市がアンリ四世に恭順し、カトリック聯盟 (la Ligue) が消滅したので、フランスは平和を回復した。一五九九年、アンリ四世はマルグリット・ド・ヴァロワ (Marguerite de Valois) (アンリ三世の妹) との結婚解消の特許をローマ教王から得ていた。その翌年、王はマリー・ド・メディシス (Marie de Médicis) と再婚した。王は四十六歳、王妃は二十七歳であつた。

アンリ四世は再婚しても浮気をやめなかつた。愛妾たちは依然として寵をうけていた。ヴェルヌイユ侯夫人(la marquise

de Verneuil）は特にお気にいりであつた。王妃をとりまくイタリア人たちは王の不行跡を探知して妃の嫉妬心をあふりたてた。かの女は嫉妬で王を責めたてた。かの女としては夫が浮気をする以上、嫉妬するのは当然だとした。王のほうでは妃が嫉妬するから浮気をするのだとした。

一六〇九年、王はシャルロット・ド・モンモランシ（Charlotte de Montmorency）に対し無体の恋を爆発させた。かの女は王が下心があつて甥のコンデ公（王の実子だとの噂があつた）にめあはせておいたモンモランシ家の姫君であつたが、コンデ公は王の恋心を察して、美しい妻をつれてブリュッセルに逃亡した。王は激怒してブリュッセル宮廷にコンデ公夫人の引渡しを要求し、あはや戦争沙汰にも及びかねぬ情勢となつた。このスキャンダルは宮廷とパリ市で大きな話題となり、王妃の怒りに油を注いだ。

王妃は嫉妬したばかりではなかつた。王は前にマルグリット・ド・ヴァロアを離婚してかの女と結婚したやうに、今度はかの女を離婚してシャルロット・ド・モンモランシと結婚するかも知れなかつた。王妃はかの女と、かの女の生んだ王子（のちのルイ十三世）の運命を気づかつたのであつた。

このスキャンダルの最中にアンリ四世は暗殺された（一六一〇年）。王のシャルロットに対する無体の執心とコンデ公に対する迫害と、かの女を保護したブリュッセル大公に対する脅迫とが、いつたん鎮圧されていたリーグ精神を再燃させ、狂信者ラヴァイヤック（Ravaillac）に剣をとらせる結果になつたのであつた。

マリー・ド・メディシスの摂政時代は動乱と醜聞の時代であつた。それはかの女のように聰明さも威厳ももたぬ摂政の下においては当然のこととも言えるのであつた。かの女の寵臣、イタリア人のコンチーニ（Concini）夫妻の放埒、不遜、

かれらの無能な政治が、コンデ、ヴァンドーム、マイエーヌ、ロングヴィル、ギーズ、ヌヴェール、ブイヨン等の大貴族の叛乱の口実となつた。一六一四年に召集された国会（États-généraux）も収穫なしに終つた。一六一五年に、成年（十四歳）に達したルイ十三世は、十三歳のイスパニアの王女アンヌ・ドートリシュ（Anne d'Autriche）と結婚した。幼時から王を育ててその寵臣となつたリュイーヌ（Luynes）は王を助けて、母后の勢力を排除した。かの女はコンチーニを寵愛して元帥に任じていたが（le maréchal d'Ancre）、王は母后のこの放埒を譴責してブロワに幽閉した。コンチーニは暗殺され、その妻ガリガイ（Galigaï）は断首され、焼かれた。

リュイーヌがアンクル元帥にとつて代つたが、かれもまた不人気であつた。一六一九年エペルノン公（le duc d'Épernon）は独断でマリー・ド・メディシスを解放した。母と子とは公然と戦争をした。リュソンの司教アルマン・デュプレシ（Armand Duplessis, évêque de Luçon）が両者を調停した。王室の分裂に乗じて新教徒の希望がよみがえつた。かれらはモントーバン（Montauban）に拠つたが、王軍によつて包囲された。この攻防戦の最中に、一六二一年リュイーヌは熱病のため急死した。ナントの勅令は再確認され、新教徒の首領らは金で買収された。母后はリシュリュー（アルマン・デュプレシ）を登用することによつて、失つた権力をとりかえそうとした。しかしリシュリューはやがてかの女の迫害者になつたのである。

ルイ十三世は王妃アンヌ・ドートリシュに愛情をいだかなかつた。一六二〇年には、王は十九歳、王妃は十八歳であつた。若い夫妻の仲ははなはだ冷やかであつた。王はつぎつぎにオートフォール夫人（madame de Hautefort）とラ・ファイエット嬢（mademoiselle da La Fayette）とにかなり烈しい執心を示した。しかし王の愛情はいつも、純潔なプラ

トニックなものであつたと言われる。

アンヌ王妃は王の冷やかな態度に当然不満であつた。かの女は王弟ガストン（Gaston d'Orléans）と共謀してルイ十三世を王位から退け、ガストンを王位につけ、かれと結婚する約束をしていたとの疑いをうけた。それは一六二六年のシャレー公（le prince de Chalais）の訴訟事件に関してであつた。王は王妃を有罪と断ずることもできなかつたし、その潔白を信ずることもできなかつた。かれは王妃を許したが、忘れはしなかつた。かれは冷淡から憎悪え、そして警戒え移つた。いかなる男性も王妃の居所に入ることを禁じられた。ガストンはモンパンシエ家の一粒種マリー・ド・ブールボン・モンパンシエ（Marie de Bourbon-Montpensier）と結婚するよう強制された。それは王妃が寡婦になつた場合にもガストンとの結婚を不可能にするためであつた。

アンヌ・ドートリシュには今ひとつの情事が伝えられている。それは英国王の寵臣で、駐仏大使であつたバッキンガム公に対するかの女の愛情であつた。しかもこれがガストンとの問題とほとんど時をおなじくしていることは注目に値する。王妃の行状は王妃として許されるガラントリーの域を越えるものがあつた。

ランブイエ侯夫人の生いたち

カトリーヌ・ド・ヴィヴォーヌ（Catherine de Vivonne）の父はピザニ侯ジャン・ド・ヴィヴオーヌ（Jean de Vivonne, marquis de Pisani）である。アンリ四世はピザニ侯を信任し、重大な外交交渉にあたらせたし、またコンデ公の教育を監督させたりした。カトリーヌの母はジュリア・サヴェルリ（Julia Savelli））といい、ローマの貴婦人であ

つた。クーザンによれば二人の結婚は一五八七年十一月八日であつた。このジュリアの母はクラリス・ストロッチ（Clarice Strozzi）と呼び、カトリーヌ・ド・メディシスの親戚であつた。ヴァロワ家の最後の三人の王はカトリーヌ・ド・メディシスの子であるから、カトリーヌ・ド・ヴィヴォーヌはヴァロワ王家とも姻戚関係があつたわけであるし、またアンリ四世の王妃マリー・ド・メディシスとも姻戚であつた。

カトリーヌ・ド・ヴィヴォーヌはその父がフランス大使としてローマに駐在していたときに生れた（一五八八年）。かの女は一人娘で兄弟は無い。かの女は一六〇〇年にランブイエ侯シャルル・ダンジェーヌ（Charles d'Angennes, marquis de Rambouillet）と結婚した。かの女は十二歳であつたわけである。クーザン（Victor Cousin: *La Société française au XVIIe siecle d'apres Le Grand Cyrus de Mlle de Scudéry*）やリヴェ（Charles-Louis Livet: *Précieux et Précieuses*）は実際十二歳で結婚したと書いているが、レデレールは十六歳で結婚したと書いている。しかしかれはカトリーヌの生年を明記していない。この一六〇〇年という年は、まえにも記したとおり、アンリ四世がマリー・ド・メディシスと再婚した年である。

ついでながらカトリーヌは一六六五年に歿した。レデレールはこのときかの女は八十二歳であつたと書いているから、かの女は一五八四年頃に生れたことになる。

ランブイエ侯の一族はアンリ四世に対してゆるぎなき忠誠をつくした家柄であつた。かれは八人兄弟の一人であつたが、そのうち一人としてリーグ（カトリック同盟）に加盟したものは無かつた。このような固い信義を守つた家族はフランス貴族界にも二つとは見あたらないのである。

カトリーヌは前記のように非常に高い家柄に生れたうえに、莫大な財産を父ピザニ侯から継承していた。（ピザニ侯はかの女の結婚の一年前に歿していた。）若い夫妻がパリーで住まつた邸もピザニ侯に属していたもので、ピザニ邸（l'Hôtel de Pisani）と呼ばれていたが、一六〇〇年来ランブイエ邸（l'Hôtel de Rambouillet）と呼ばれることになつた。

シャルル・ダンジェーヌは結婚したときには父侯爵が存命中であつたので、ヴィダーム・ド・マン（vidame de Mans）と称していたが、一六一一年に父侯爵が歿したので、ランブイエ侯となつた。正確に言えば、カトリーヌがランブイエ侯夫人と呼ばれるのその時からのちのことであるが、われわれは便宜上結婚後のカトリーヌをランブイエ侯夫人と呼ぶことにしよう。

ランブイエ邸

ランブイエ邸の位置は現在のパレ・ロワイヤルとセーヌ河との中間で、今日ではルーヴル宮の中に含まれているが、その頃サン・トマ・デュ・ルーヴル街（rue Saint-Thomas-du-Louvre）と呼ばれていた街路に面していた。この街路は南北に延び、北の端はパレ・ロワイヤルの前でサン・トノレ街に接していた。この街にはランブイエ邸のほかに、ロングヴイル侯邸もあつたのである。

ロシュギュード侯爵（marquis de Rochegude）とモーリス・デュモラン（Maurice Dumolin）の共著『旧パリ案内記』（*Guide pratique à travers le vieux Paris*）によると、この邸はもとヴァンドーム家のものであり（一三七八）、ついでラ・マルシュ（La Marche）家に移り（一三九九）、一五九〇年にピザニ侯のものになつた。ランブイエ侯

夫人がこの邸に居をかまえたのは一六〇七年であり、かの女の設計によつてこの邸に大改造を施したのが一六一八年となつている。この邸は夫人の、四女ジュリー・ダンジェーヌ（Julie d'Angennes）の結婚によつて一六五二年にモントージェ（Montausier）家のものとなり、さらにクリュソル・デュゼス（Crussol-d'Uzès）家にうつり、オルレアン家の厩舎となり、一七九二年にヴォードヴィル劇場となり、一八三六年まで存続した。

ランブイエ侯夫人はイタリア育ちで美術や建築について深い趣味をもつていた。かの女自身絵画をよくしたと言われる。かの女は古いピザニ邸の建物が気にいらず、改造を思いたつた。当時の建築家の多くはイタリア出身者であつたが、かの女の気にいるような設計を考案してくれるものは無かつた。そこでかの女はみずから設計図をひき、これにもとづいて古い建物を壊したあとに新らしい邸宅を建てさせた。その時期は前記『旧パリ案内記』では一六一八年となつているが、クーザンによれば、アンクル元帥の時代、すなわち一六一〇年から一六一七年に至る時代となつている。

この新らしい建築は当時として非常に目新らしいもので、その後多くの追随者を出した。従来の邸宅建築では階段を中央に設け、その両側に部屋を配置するのが例となつていた。その結果として、あまり大きくない区切りの室が多くできた。ランブイエ侯夫人の設計では階段を一方の端に置いてあつた。そのために、区切りの数は少くなつたが、広くなり、幾つかの部屋が平面につらなつていたので、多数の客を迎えるのに好都合であつた。ランブイエ侯夫人が客人を迎えたサロン（キャビネと呼ばれた）は一階にあつた。この部屋の窓は床から天井まで大きく開かれて庭園にむかつていた。そのために部屋は非常にあかるく、また通気もよかつた。この点も夫人の設計のあたらしさであつた。このキャビネに続いていくつかの客間があり、来客の数に応じて開かれた。客はこれらの部屋を通つて夫人のサロンに達するのであつた。このサロ

ンは金のふちどりをした青色のビロードの壁掛けで覆われていた。有名な「青い部屋」(la chambre bleue) である。この部屋で女主人は寝台に坐つて来客を迎えたのである。

スキュデリ嬢 (mademoiselle de Scudéry) は有名な小説『ル・グラン・シリュス』(*Le Grand Cyrus*) の第七部・第一巻に、クレオミール (Cléomire) の名でランブイエ侯夫人のことを語つている。スキュデリー嬢は早くからこのサロンの常客の一人であり、その隆盛期とその凋落期の目撃者であつた。かの女はクレオミール邸について次のように言つている。

クレオミールは自分の設計で邸宅を造らせたが、この設計は世界でもつとも巧みなものの一つである。かの女はさまで広くない土地にひろびろとした邸宅をつくる術を見いだしたのだつた。秩序と整齊と適正とがどの部屋にも、どの家具にも見られる。そこではすべてが荘麗であり、独特である。ランプも他家のものとは異つている。各部屋には数々の珍らしい品が飾られているが、いずれもそれを選んだひとの高い趣味を示すものばかりである。かの女の邸では空気はいつでも芳香を含んでいる。種々のみごとな籠に花が盛られて、かの女の部屋はいつも春である。そしてかの女のいつも居る場所はまことに快適で、実によく考案されているので、ひとはそこでかの女のそばにいると、まるで魔術にかけられたような気がするのである。

ランブイエ侯夫人の子供たち

レデレールはその著『フランスに於ける社交界』の中で、「一六〇〇年に十六歳で結婚したランブイエ侯夫人は、一六一〇年には七人の子の母であつた」と書いている。しかしこれは確実でないように思われる。この点についてはクーザンのほうが信用できると思う。（前掲の書の第二八七頁）それによると夫人の子供たちについては次のことが知られる。

かの女は二人の男子と五人の女子とを生んだ。長男はレオン・ポンペ・ダンジェーヌ（Léon-Pompée d'Angennes）といい、一六一五年に生れ、ピザニ侯を名乗つた。かれはアンギヤン公に従つて出陣し、一六四五年にノルトリンゲン（Nortlingen）の戦いで戦死した。三十歳であつた。ズキュデリや、ゴンボーや、トリスタンなど、ランブイエ邸の常連である詩人たちが、この英雄の死を歎き、称えている。

次男は一六二四年に生れヴィダーム・ド・マンと称したが、七歳のときペストで死んだ。

五人の娘のうち上の三人に尼僧になつた。二人は相次いでイエール尼僧院（le couvent d'Hières）の院長になつた。三番目の娘はランスのサンテチエーヌ僧院（l' abbaye de Saint-Étienne de Reims）の院長になつた。

四女はジュリー・リュシー・ダンジェーヌ（Julie-Lucie d'Angennes）で、一六〇七年に生れた。かの女は母についでランブイエ邸の明星となつたが、一六四五年にモントージェ公（le duc de Montausier）と結婚し、ルイ十四世の王太子の教育係りとなり、ついで皇后の主席女官（la première dame d'honneur de la Reine）となつた。

末女アンジェリク・クラリス・ダンジェーヌ（Angélique-Clarisse d'Angennes）はジュリーにくらべると容色も性格も

劣つていたようである。かの女は一六五八年にグリニャン伯アデマール・ド・モンテイユ（Adhémar de Monteil, comte de Grignan）と結婚したが、一六六四年に二児を残して死んだ。（グリニャン伯はその後セヴィニェ夫人の女フランソワーズ・ド・セヴィニェと結婚した。）

レデレールによれば、次男ヴィダーム・ド・マンが一六三一年に流行したペストに罹つて死んだとき、ランブイエ侯夫人とジュリーとは、家人のすべてが感染を恐れて逃げ去つたのちも病床をはなれず看護し、病人はかの女たちの腕に抱かれて息をひきとつた。モントージェ伯はこの話を聞き知つてはじめてランブイエ侯夫人とジュリーとを知りたいと願うようになつたのだと言う。（Roederer. p. 80.）

ランブイエ侯夫人のひととなり

ランブイエ侯夫人のひととなりについて、クーザンは次のように言つている。（前掲の書の第六章）

これは非常にすぐれた婦人であつたにちがいない。というのは、かの女に接した人たちは、その持論、利害、階級、性格のいかんにかかわらず、すべてがかの女をほめている。われわれはかの女に関して、少しでもひと目につく生涯を送つた人物につきものの、中傷とか悪口とか、意味の紛らわしい言葉とか、軽微な諷刺とか、そんなものを探してみたが、数世代にわたつて、実感のこもつた賞讃の合奏よりほか見いだすことができなかつた。文士という種族は、熱狂性が乏しく、他人の愚劣さを見てとることに巧みで、且つはやく、外部の人について意見の一致することは絶えてなく、

たがいに仲間同志で傷つけあつているものだが、ランブイエ侯夫人に関する限り、驚くほど一致しているのである。かの女はタルマン（Tallemant des Réaux）をさえ征服している。十七世紀の漫画家（訳註、比喩的の意味）で、もつとも低俗な蔭口をも熱心に探し、喜んで掻き集め、もつとも純潔な、あるいはもつとも寛容にあたいする名声をそれで汚し、少しでもひとの弱点をかぎつけると、すぐに下卑たことや不潔なことを想像するあのタルマンが、どんな手蔓によつたのか、ランブイエ邸に出入りを許され、――それもかなり遅くであつたようだが――たいして認められたわけでもなく、――ヴォワテュール（Vincent Voiture）の手紙のなかに一度も、かれの名が出たことがない――この邸の常連のすべてに対しては、無遠慮な悪口を言つているのに、女主人に対してだけはそれをせず、いやむしろ、このような人物としてはいじらしいほどの感動をこめて、かの女をほめちぎつているのである。かれは特別の心づかいをもつてかの女のことを紹介し、その生涯を、その夫の、その子息や令嬢の、その娘聟たるモントージェの、その主だつた交友の生涯を語つている。そんなわけだから、ランブイエ邸の最盛期の常連の一人で、好意と感謝にみちていたスキュデリ嬢が、タルマンにゆずらなかつたのは当然であつた。かの女は実際かれのすべての讃辞をくりかえした、と言うよりは、かれの先を越しているのである。というのは、タルマンがその備忘録のこの部分を書いたのは一六五七年のことであるが、スキュデリー嬢の『ル・グラン・シリュス』は一六五一年十一月のことであつた。そればかりではない、かの女はゆるがせにできない一つの点について、新らしい資料をわれわれに提供してくれているのである。

クーザンは、ランブイエ侯夫人の肖像画が一つも伝わつていないこと、同時代の人が一人として夫人の容貌を詳細に記

述していないことについて遺憾の意を表したのち、かれがアルスナル図書館で発見した『ル・グラン・シリュス』の未発表の『人物手引き』(la clef) によって、クレオミール (Cléomire) と呼ばれるアテネに生れてティール (Tyr) に住んでいる貴婦人は、ローマに生れてパリに住んでいるランブイエ侯夫人その人を指したものであることを確めたうえ、スキュデリー嬢の小説の一部を引用している。

クレオミールは背丈が高く、美しい姿をしています。顔の輪画はすべてすばらしいのです。顔色の微妙なことは言いあらわす言葉もありません。かの女の全身から感じられる威厳は讃歎にあたいします。かの女の眼から出る言い知れぬ輝きはかの女を視るすべての人の魂に尊敬を刻みつけます。私としては、かの女に近づくたびごとに、一種言いがたい畏敬の念に打たれ、ほかのどんな場所にいたときよりも、かの女の側にいたときに、自分自身のことを考えずにはいれなかったことを白状します。それに、クレオミールの眼はじつに美しくて、誰もそれをよく言いあらわしたものはありません。でもそれは讃歎の情を起させても、ほかの美しい眼がひとの心に起させるようなものを起させない眼なのです。というのは、愛情を感じさせるにしても、かならず同時に恐れと尊敬とをいだかせ、情熱をかきたてられた心を清らかにしてしまう特別の力をもっていたからです。かの女の眼の輝きと優しさのなかには、多分の謙譲さが含まれていて、かの女を見る人にそれが伝わるので、クレオミールのまえで邪念をいだくような大胆不敵な男性なんか決していないと確信しています。かの女の顔は私がいままで見たもっとも、美しい、もっとも気高いものです。そしてかの女の顔には平静さがあらわれており、その魂がどんなに平静であるかを、あきらかに示しています。そればかりか、か

の女の一切の情念は理性に従わせられており、その心のなかでひそかな戦いなどしていないことがわかるのです。実際かの女の頬に見られる赤味がその限度をこえて、顔全体にひろがつたことがあろうとは思われません。夏の暑さのためとか、羞恥のためとかならいざ知らず、決して怒りのためや、魂の困惑のためではありません。それゆえクレオミールはいつも変らず平静なので、いつも変らず美しいのです。要するに、「貞潔」というものを地上のすべての人に渇仰させるために、それを具現しようとするならば、私はクレオミールで代表させたいと思います。また「栄光」をすべての人に愛させるために、それを具現したいならば、やはり私はかの女の肖像を描きたいと思います。また「徳性」を具現したいならば、やはりかの女を代表とします。

レデレールは『フランスに於ける社交界』の中で、侯夫人の人となりについて次のように書いている（四五頁以下）。

かの女の生活はまつたく引籠りがちであつた。かの女の平常の楽しみは、ひとりのときは、素描をしたり、油絵をかくことであつた。当時の有名な版画家であつたカロー（Callot）の名を借りて、ヴォワテュールがかの女に書いた手紙の中で、かの女のデッサンの才能を祝福している。客とともにいるときのかの女の楽しみは会話であつた。平常の楽しみのほかでは、観劇を好んだ。その頃は芝居は毎日は無かつたし、芝居のある日は必ず見にゆくというわけではなかつた。（中略）メナージュ（Ménage）はランブイエ侯夫人については、いつでも尊敬をもつて語つている。「感歎すべき女性であつた」とかれは言つている。ヴォワテュールは「神々しい女性」とかの女を呼んでいる。スグレー（Segrais）

は少しおくれてかの女を知ったのだが、こんな風にかの女のことを語っている。「かの女は慈悲ぶかく、愛想がよかった。そしてかの女はまっすぐな、正しい精神をもっていた。かの女の以前にあったいまわしい習慣を矯正したのはかの女である。かの女は親しく交際した同時代の人たちに礼節（la politesse）を教えたのである。かの女はまた深切で、すべての人に恩恵をほどこした。」

（未完）